

平成24年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	国際理解教育研究としての内モンゴルのオルティン・ドー研究 —音楽学と音楽教育学の協働を通して—
------	--

研究代表者

氏名 遠藤 徹	所属 芸術スポーツ科学系	職名 准教授
------------	-----------------	-----------

研究分担者

氏名 加藤富美子	所属 芸術スポーツ科学系	職名 教授
徳木其格（デムチグ）	東ウジュムチン旗政教・東ウジュムチンオルティンドー協会	

【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）

オルティン・ドーはモンゴル民族の代表的な声楽音楽であり、ユネスコの世界文化遺産として指定されている。わが国でも、中学校、高校の音楽教科書に世界の諸民族の音楽を代表するものとして早くから取り上げられてきた。しかし、日本においては、モンゴル国で伝承されてきたオルティン・ドーのみが取り上げられており、内モンゴルにおいてオルティン・ドーが別の発展を遂げてきたことは知られていない。

本研究は、近代以降の激動のアジア史の中で、数々の困難を経つつも今日にモンゴル民族の伝統を伝えている内モンゴルのオルティン・ドーを例に、音楽学と音楽教育学の協働により、わが国における音楽を通じた国際理解教育に新たな枠組みを提案すること目的としている。研究は、内モンゴルのオルティン・ドーの歴史と現代社会における有り様を認識し、文献ならびに視聴覚資料の調査によりモンゴル族のオルティン・ドーの文化的・社会的多様性を明らかにした上で、内モンゴル東ウジュムチン旗オルティンドー協会より、研究協力者（会長）、歌手、民族楽器奏者（合計9名）を招き、東京学芸大学においてワークショップ・シンポジウム・公演、意見交換を行なうかたちで進めた。その成果は東洋音楽学会第63回大会において、共同研究として発表した。

同じモンゴル民族の伝統音楽でありながら、近代以降の内モンゴルのオルティン・ドーは、20世紀に旧ソ連の影響を強くうけたモンゴル国のオルティン・ドーとは異なる歴史をたどってきた。内モンゴルは第二次世界大戦後、中華人民共和国の自治区となり、広大な土地で長い間遊牧民の伝統が保たれてきた。しかし近年の中華人民共和国の経済活動の活発化にともなって、現在は大きな変革期にさしかかっている。アジアの伝統音楽全般に見られる西洋音楽からの影響、漢民族の音楽からの影響に加えて、近年は急速に進む市場化、都市化の影響が顕著で、その背後にあるのは伝統的な遊牧生活の衰微の問題である。

本研究では、こうした激動の中で地道な活動を行っている東ウジュムチン旗オルティンドー協会の一線の方々を招き、内モンゴルのオルティン・ドーの技法や特質を実演付きで公演してもらいつつ、協会の設立の動機やこれまで行ってきた活動、内モンゴルのオルティン・ドーが現在かかえている問題点などについてもお話いただき、意見交換を行った。一例ではあるが、具体的な事例を提示することで、音楽を通じた国際理解教育の新たな枠組みの一端を示しえたであろう。

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

「ウジュムチン・オルティン・ドーの継承をめぐる－東ウジュムチン旗オルティン・ドー協会が果たす役割－」、徳木其格、ツリグラ、遠藤徹、加藤富美子、塚原健太、一般社団法人東洋音楽学会第63回大会（国立音楽大学）